

問二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

今は昔、比叡山に僧あり。いと貧しかりけるが、鞍馬に七日参りけり。夢などや見ゆるとて参りければ、見えざりければ、今七日とて参れども、なほ見えねば、七日を延べ延べして百日参りけり。その百日といふ夢に、「我はえ知らず。清水へ参れ」と仰せらるると見ければ、明くる日より、また清水へ百日参るに、また、「我はえこそ知らね。賀茂に参りて申せ」と夢に見てければ、また賀茂に参る。

七日と思へども、例の夢見ん夢見んと参るほどに、百日といふ夜の夢に、「わ僧がかく参る、いとほしければ、御幣紙、打撒の米ほどのもの、たしかに取らせん」と仰せらるると見て、うちおどろきたる心地、いと心憂く、あはれにかなし。所々参り歩きつるに、ありありてかく仰せらるるよ、打撒の代はりばかり賜はりて、何かはせん。我が山へ帰り登らむも人目はづかし。賀茂川にや落ち入りなましなど思へど、またさすがに身をもえ投げず。

いかやうに計らはせ給ふべきにかとゆかしき方もあるれば、もとの山の坊に帰りてゐたるほどに、知りたる所より、「もの申し候はん」と言ふ人あり。「誰ぞ」とて見れば、白き長櫃を担ひて、縁に置きて帰りぬ。いとあやしく思ひて、使を尋ねれど、おほかたなし。これを開けてみれば、白き米と良き紙とを「長櫃」に入れたり。これは見し夢のままなりけり。さりとてこそ思ひつれ、こればかりをまことに賜びたると、いと心憂く思へど、いかかはせんとて、この米をよろづに使ふに、ただ同じ多さにて、尽くることなし。紙も同じごとに使へど、失することなくて、いと別にきらきらしからねど、いとたのしき法師になりてぞありける。

3 なほ、心長く物語ではすべきなり。

(「宇治拾遺物語」から。)

(注) 御幣紙 神前に捧げる物を作るための紙。

打撒の米 参拝のときにまく米。

坊 僧が住む建物。僧坊。

長櫃 ふたの付いた木製の長方形の大きな箱。

(ア) 線1「賀茂川にや落ち入りなまし」とあるが、その意味として最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 賀茂川に飛び込んだときのようだ。

2 賀茂川に飛び込んで死んでしまおうか。

3 賀茂川に飛び込めと言われるかもしれない。

4 賀茂川に飛び込んで笑われるほうがましだ。

(イ) 線2「いと心憂く思へど」とあるが、「心憂く」思った理由として最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 いつ、誰が、どのような目的で米と紙を運んできたのかも、その米と紙をどう取り扱えばいいのかもわからず、気味が悪かったから。

2 以前見た夢の内容とまったく同じことが起きたので、米と紙をもらったことも夢に違いないと思いい、気が抜けてしまったから。

3 お参りを繰り返したにもかかわらず、神仏から授けられたのが米と紙という、夢の中で言われた物だったことにつながりしたから。

4 神仏のご利益である米と紙を受け取ってしまったら、またお参りを始めなければならないのではないかと恐れたから。

(ウ) 線3「なほ、心長く物語ではすべきなり。」とあるが、それを説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 有名な神社にお参りすることによって、さまざまな神仏とめぐりあい、たくさんのご利益を得られるということ。

2 辛抱強くお参りを続けていれば、やがては神仏の日に留まり、ご利益が得られるようになるということ。

3 夢のお告げに従っていろいろな寺社にお参りすれば、いつの間にか人から尊敬されるようになるということ。

4 厳しい修行を重ねながらお参りすることによって、米と紙だけで裕福になる方法が神仏から授けられるということ。

(エ) 本文の内容と一致するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 「僧」は、鞍馬寺だけでなく清水寺や賀茂神社へもお参りさせた神仏に文句を言ったために、それほどのご利益は得られなかった。

2 神仏の言葉に従って寺や神社にお参りした「僧」は、自分が金持ちになる夢を見たが、目が覚めると貧しいままだった。

3 いろいろな寺や神社にお参りして徳を積んだ「僧」は、人々から米や紙を恵んでもらい、次第に裕福になっていった。

4 「僧」は、賀茂神社にお参りしたときに聞いた夢のお告げの内容に失望したが、あとでありがたいものだとなった。

問四 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

一 休(注)界へ御下りの時、淀(注)の河瀬舟に乗りたまひけるに、そのふねの乗りあひに山伏(注)有りけるが、「御僧はなにしうぞ」と問ふ。一 休「われらは禪宗なり」と答へられければ、「禪宗にはわれらが」とき、きどくはあらじ」といひける。一 休申さるるは、「いかにもきどくおほし。其方(注)にも何にてもきどくあらば、見せたまへ」と仰(注)せられければ、「いで、われらが法力(注)にて、此舟(注)のへさきにふどう(注)をいのり出して御日にかけてむ」と、一にこんがら二にせいたかをはじめて、もみにもうで折りければ、皆々のりあひのもの共、目と目と見あはせをる処(注)に、あんのごとく船のへさきに、たちまちふどうの像(注)、くはえん(注)をはなつてあらはれたり。其時(注)山伏ぢうめんをつくりて、「おのおのおがみたまふか」と申しければ、皆人ふしぎの思ひをなしけれども、一休は吏(注)にふしぎにもましまさぬふりなり。「いかに禪僧、かかるきどくは如何にし給はん」と、せぐりかけて申しければ、「我らがきどくには、身より水を出して、あの火えんを放つ不動をけして見せん。随(注)分析り給へ」とて、彼不動の像の火焰(注)に、小便(注)をしたたかけ給へば、火焰は其ままきえて、山伏の法力つきければ、みな人一休を礼して、奇異の思ひをなしけるなり。

〔「一休ばなし」から。一部表記を改めたところがある。〕

(注) 界 現在の大阪府堺市。

きどく 奇特。神仏のもつ不思議な力。

法力 仏法を修行して得られた不思議な力。

一にこんがら二にせいたか 山伏が法力を用いるときに唱える文句。「鈴(注)羯羅」「制多迦(注)」は、

不動明王の脇に従う童子のこと。

もみにもうで 数珠(注)を激しくこすり合わせること。

ぢうめん 洪面。しかめっ面。

(ア) —線1「山伏ぢうめんをつくりて」とあるが、そのときの「山伏」について説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 「一休」を含め、舟に乗り合わせた人たちが自分の法力に半信半疑であることを察して、機嫌が悪くなっている。

2 自分の法力によって不動明王を呼び出すことができたことを舟に乗り合わせた人たちに自慢したがつている。

3 現れた不動明王が自分の法力によるものではないことに気づきながらも、それを悟られないように平静をよそおっている。

4 「一休」にそのかされたとはいえ、調子に乗って自分の法力を人々に見せてしまったことを悔いている。

(イ) —線2「更にふしぎにもましまさぬふりなり。」とあるが、「一休」のどんな様子を表しているか。最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 不動明王の出現に驚いている人たちを不思議そうに見ている様子。

2 不動明王が現れたことを全く不思議だとは思っていない様子。

3 不動明王を出現させた「山伏」の不思議な法力を認めまいとしている様子。

4 不動明王の不思議な力を人々とともに確かめようとしている様子。

(ウ) —線3「みな人一休を礼して」とあるが、みな「一休」を拜んだ理由として最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 不思議な法力を見せた「山伏」に、「一休」が不思議でもなんでもないありふれたやり方で対抗して、見事に「山伏」を打ち負かしたから。

2 舟に乗り合わせた人たちに横柄な態度で言いがかりをつけていた「山伏」を、「一休」がうまく言い負かすことができたから。

3 「山伏」の法力によって現れ、人々を怖がらせた不動明王を、「一休」が奇特を駆使して退治してくれたから。

4 「山伏」がへさきに呼び出した不動明王のせいで火事になりかけた舟を、「一休」がとっさの行動で守ってくれたから。

(エ) 本文の内容と一致するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 舟に乗り合わせていた人たちも「山伏」も、不動明王の火炎がなぜ急に消えたのが最後までわからなかった。

2 「山伏」は、禪宗には奇特がないと言って「一休」を見下していたが、「一休」に奇特を見せられて感動し、禪宗に改宗した。

3 奇特を見せることを「一休」に要求された「山伏」は、数珠を用いて祈ることで、火炎を放つ不動明王を出現させた。

4 「一休」は、自分の奇特では不動明王を呼び寄せられないと思い、「山伏」の呼び出した不動明王に小便をかけてごまかした。